

四日市遺跡

四日市遺跡は、江戸時代の西国街道（山陽道）沿いに発展した宿場の町屋跡を中心とした遺跡で、西条駅前土地区画整理事業に伴って平成10年度から発掘調査を実施しています。その結果、近世・近代の遺構や遺物が多量に出土しています。



平成14年6月15日（土）
財団法人東広島市教育文化振興事業団

「四日市遺跡」とは？

遺跡名の“四日市”とは、当地域の古い村名「四日市次郎丸村」によりますが、中世に開かれた荘園内の市場が起源と考えられます。『藝藩通志』によると天正年間(1572～1592)に市駅になったと記されています。

『中書家久公御上京日記』には、天正3(1575)年に「さいちやうの四日市」を通過する様子が記され、『九州御勤座記』によれば、天正15(1587)年に豊臣秀吉が「四日市の旦過寺」に泊まっている。少なくとも中世末には四日市という町が成立していたことがわかります。また、「慶長4(1599)年四日市町割」(『鶴亭日記』)を経て、寛永年間(1624～1644)の幕府巡見使の巡察を機に、街道が整備され、宿場町として急速に栄えていったと考えられます。

調査成果

現在残されている絵図の中に、「竹内家文書 宿駅西条四日市絵図」(図1)があります。屋敷は長方形に区切られ、部屋割りなどが詳細に記されています。

発掘調査では、石組の溝によって区切られた縦長の区画(図4)が幾つも確認できました。これが、絵図のような屋敷の範囲を示しており、街道に接する「間口が狭く奥行きが深い」という近世の町割の特徴をよく現しています(図2・3)。

江戸時代の屋敷を区画する石組溝とは方位や性格が異なる溝(図4)、醸造遺構らしい土坑の発見や、赤絵・大皿など日常の食卓にはあまり使わない(宴会用?)食器類など、成果と課題が見つかりました。

今後に期待されること

四日市以前のすがたは？

宿場町の前は市場町なのか

宿場町四日市がいつ頃成立し、発展したのか

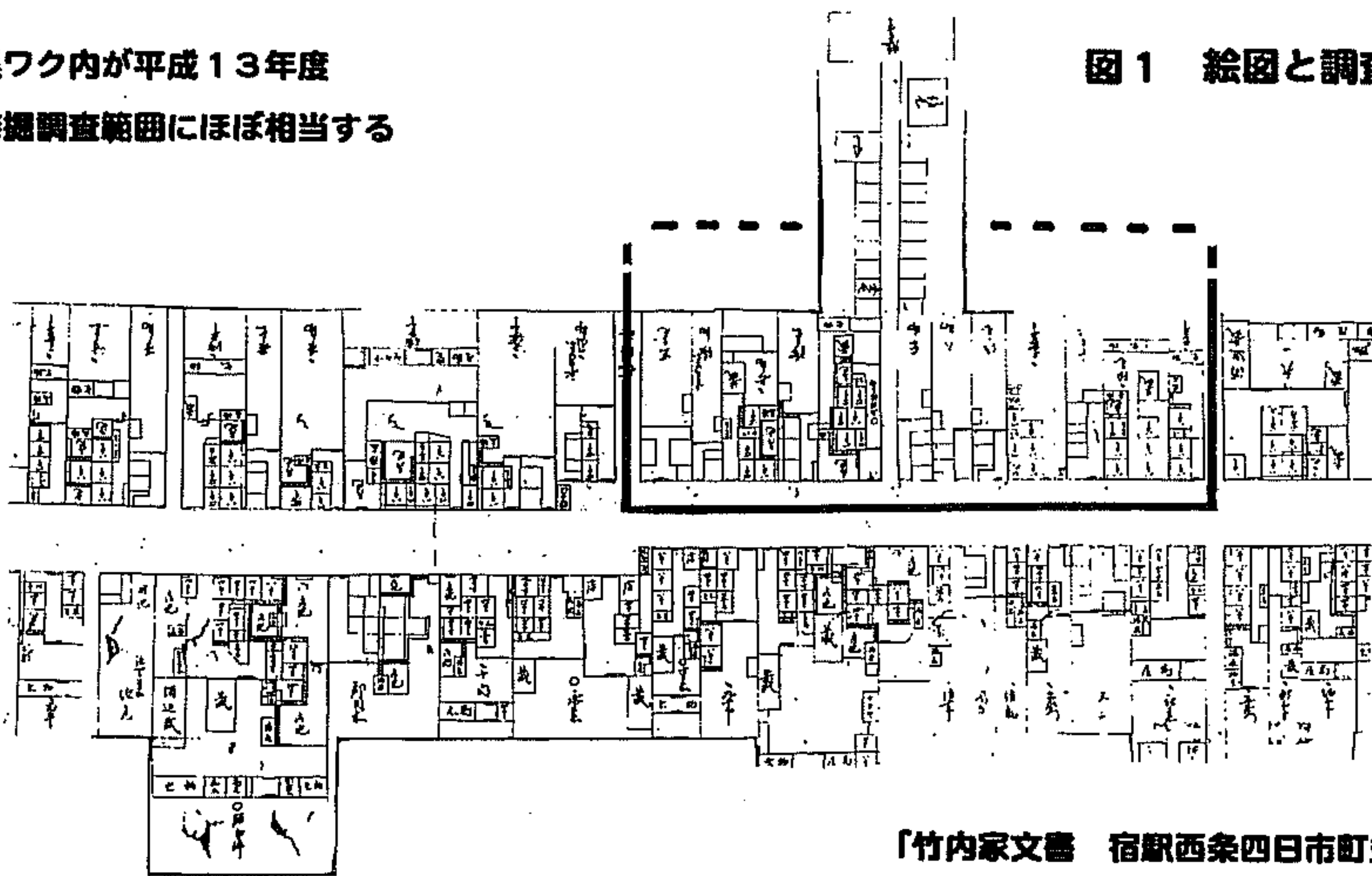
四日市らしさとは？

絵図と遺構から垣間見える幕末期の四日市

酒都西条と醸造遺構

黒ワケ内が平成13年度
発掘調査範囲にほぼ相当する

図1 絵図と調査範囲



「竹内家文書 宿駅西条四日市町並絵図」
の一部を引用。 (広島県立文書館蔵)

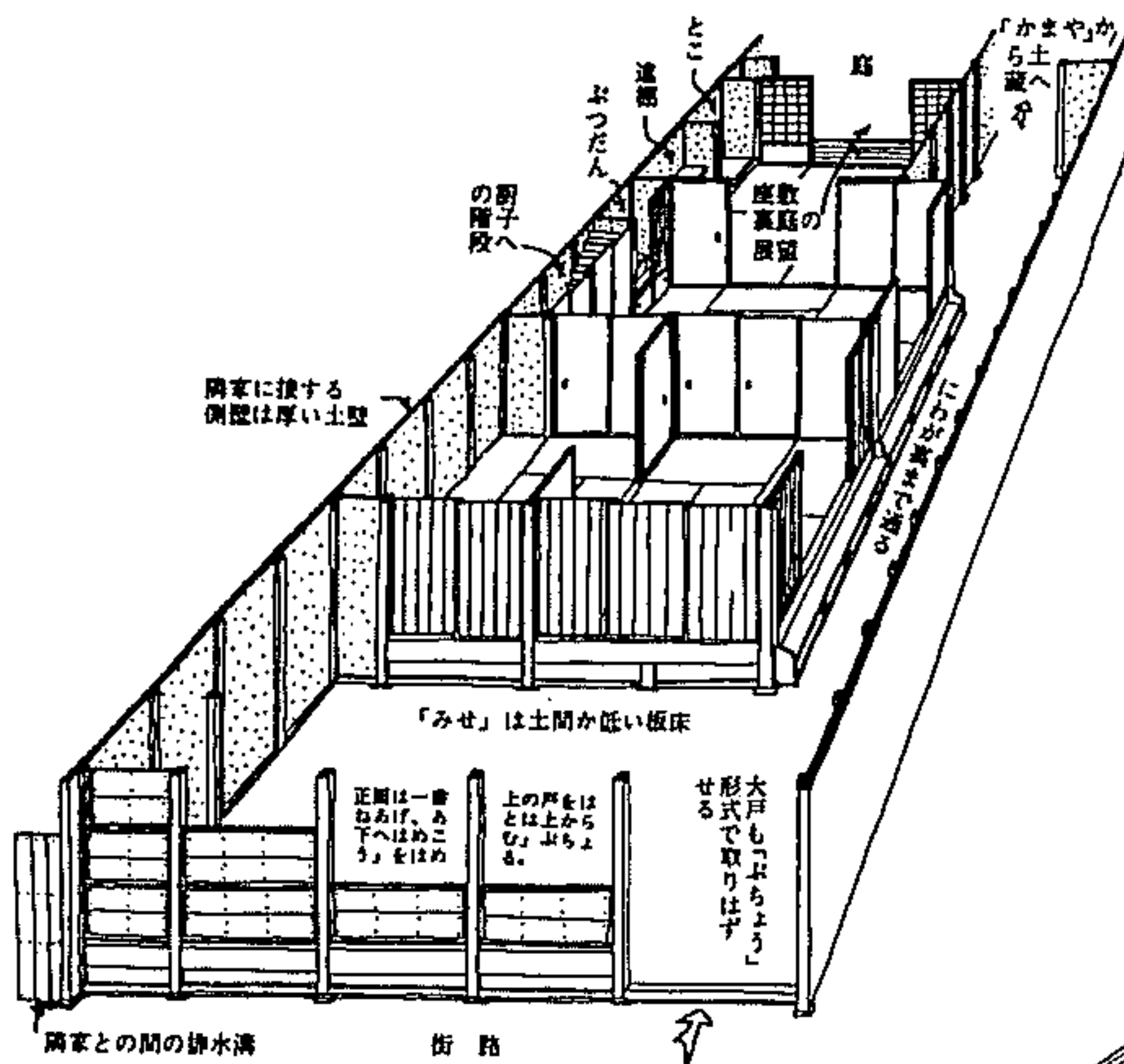


図2 町屋の基本構成
(山口県柳井市)

図3 町屋の構成
(山口県柳井市)

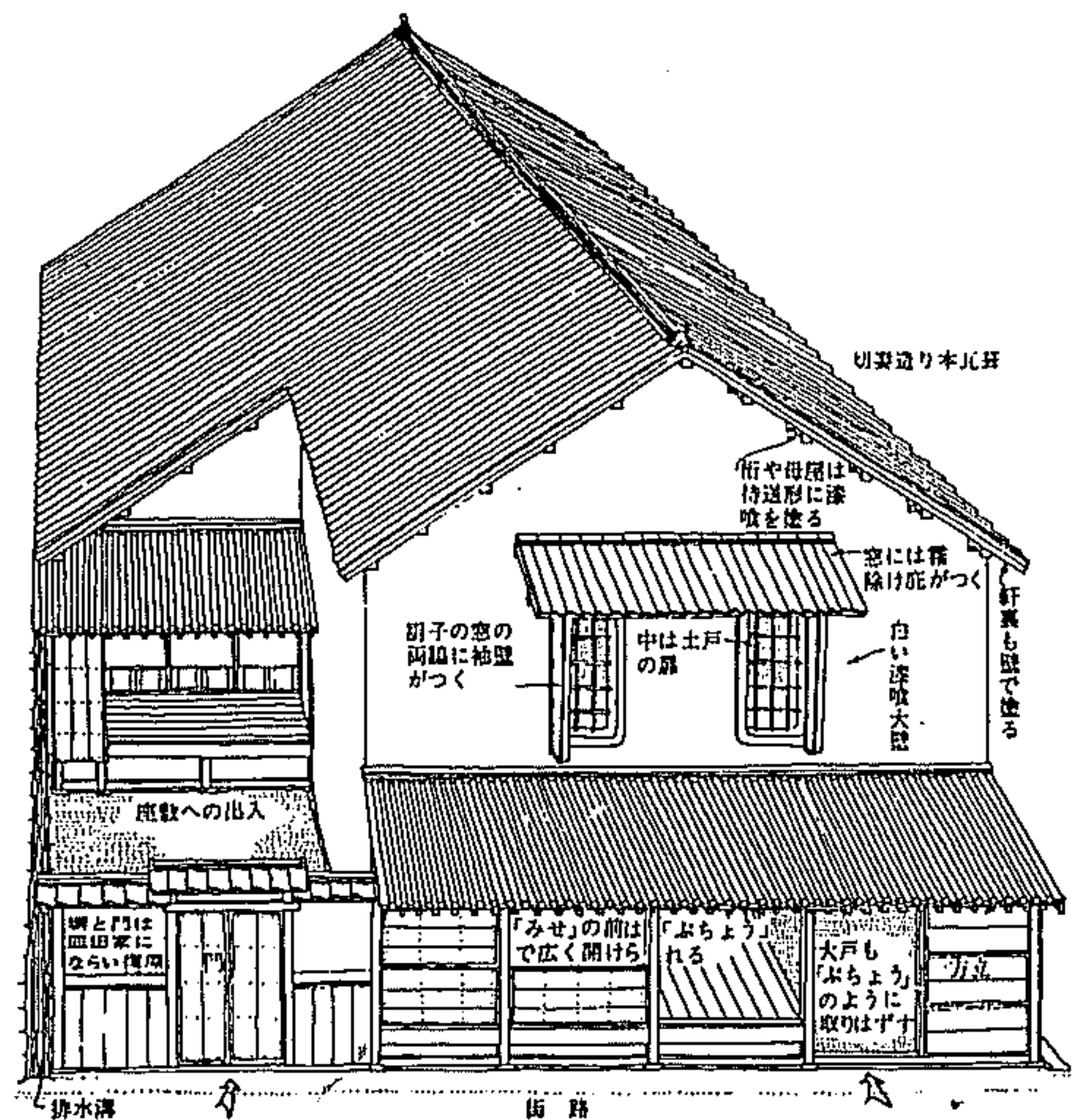
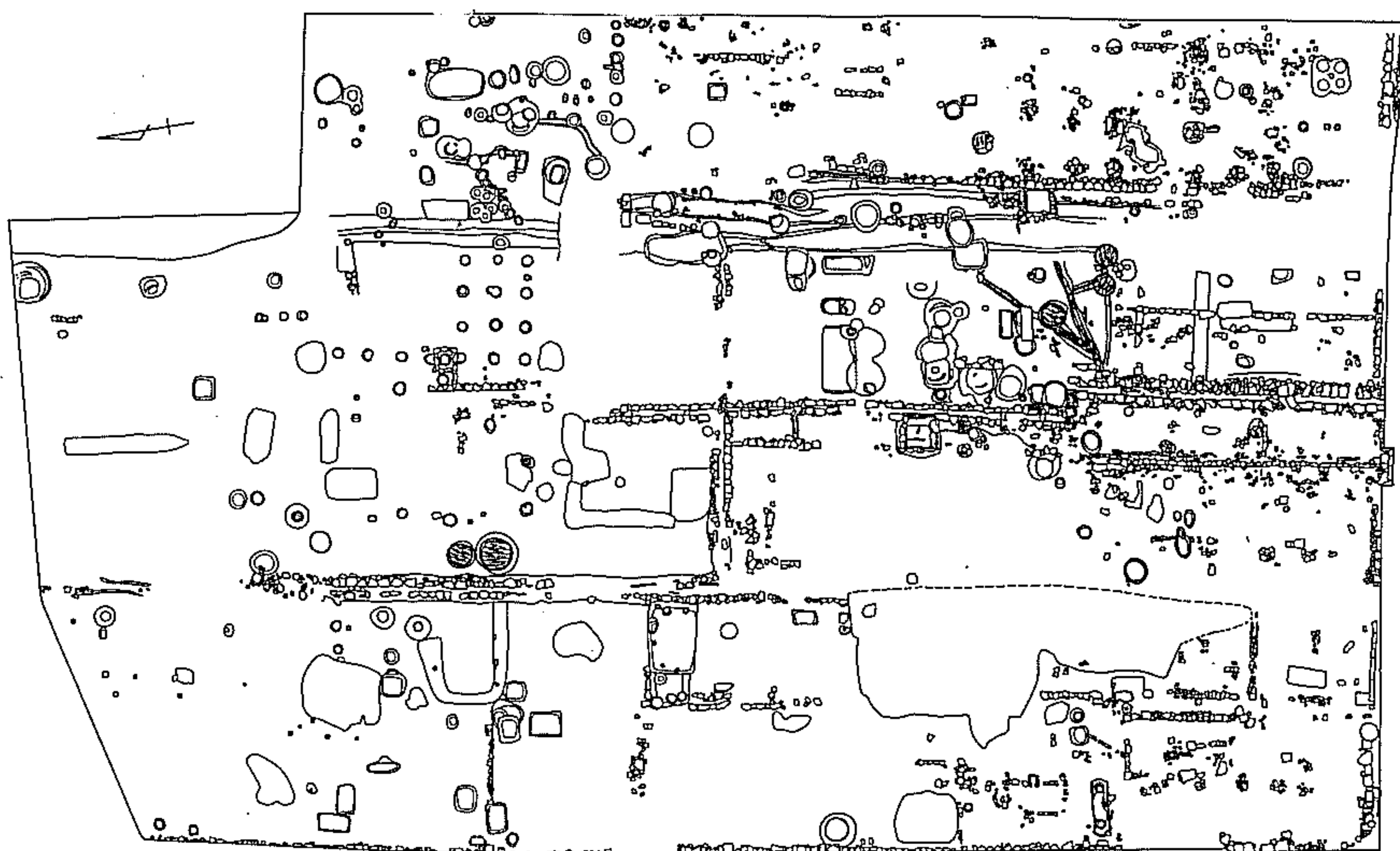
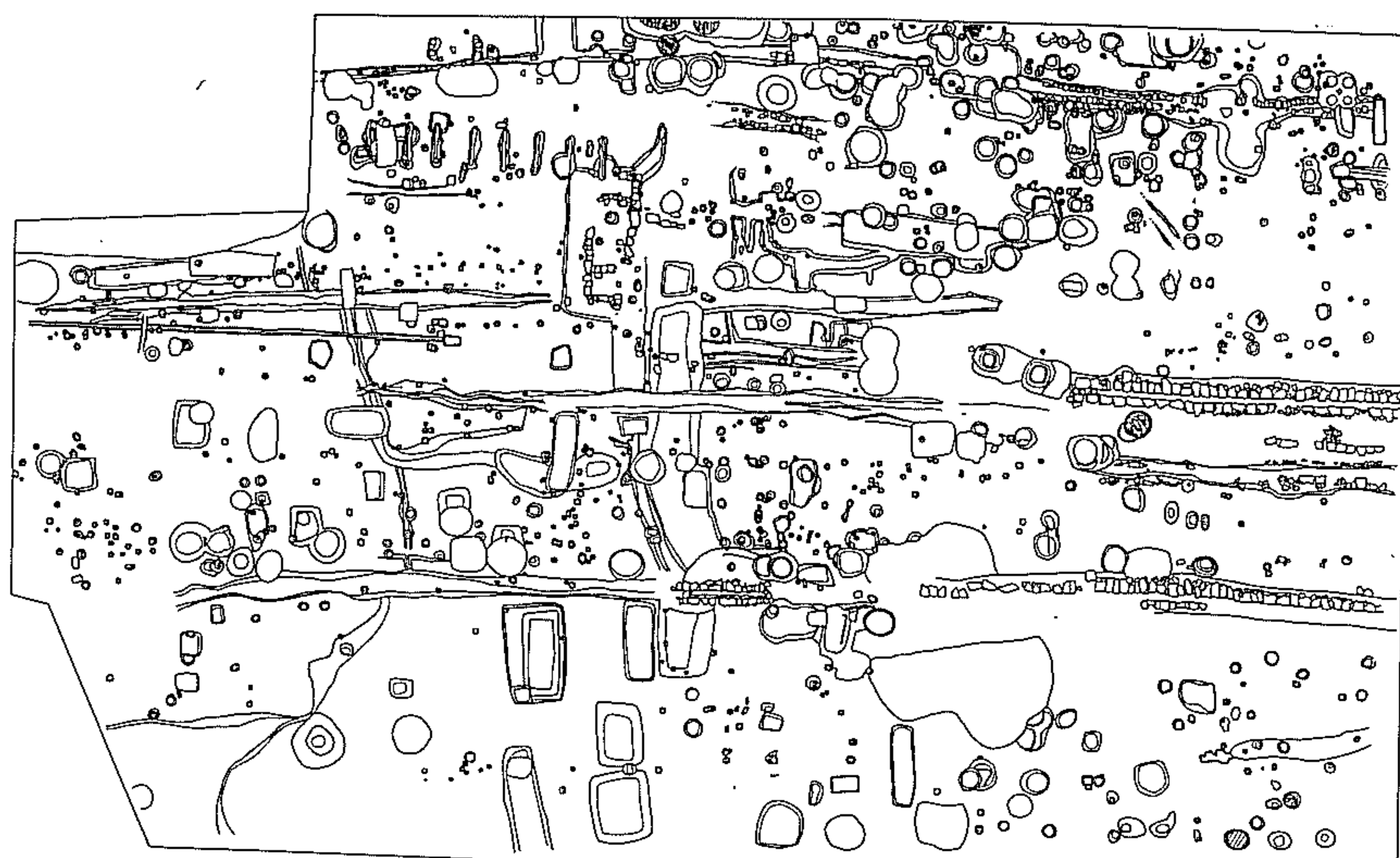


図4 平成13年度四日市遺跡遺構配置図 (S=1:400) の一部



上層



中層